
紅き腕輪 第零章

Earth

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅き腕輪 第零章

【Zマーク】

Z95970

【作者名】

Earth

【あらすじ】

意識が遠のく・・・
なぜ意識を失ったのか・・・
まだ思い出せない
なんでこんな事になったのか、そしてこれからどうなるか
まったくもって「理解できん」

（腕輪）

第零章　～　墮者だしゃ　～　序幕

意識が落ちるような感覚・・・
そういうモノだと知覚した。

男「ああ、落ちてるのか・・・」

不思議と声を出すことは出来るのだが、体は動かない。
手は握れるが、腕は重く、動かず。足は神経は通っているものの、
ほぼ自由に動かせない。

周りは黒いだけ、自分の体すら見えないほどの黒。

男「なんだってこんな事になつたんだつけな」

思い出そうとしても頭がうまくまとまらない。

男「そりや どうか、こんな落下しているような状態でまともに考え
ろという方が難しいな」

一人で呟いてみるが、誰にも聞こえるはずはなかつた。
ふいに、下に柔らかな感覚が訪れた。と、同時に軽い衝撃が男の

背中を打つ。

男「ぐつ、いつう！」

背中を軽くとはいえ打ちつけて声を漏らしてしまつ、それと同時に違和感を覚える。

男「ん、動けるの・・・か？」

手の感覚がはつきりと伝わり、自由に動かせる。背中も痛みはあるものの、体を起こすことができる。足もちゃんと2本ともついているようだ。

男「ま、死んだ・・・ってわけじやなさそうだな」

ゆっくりと上体を起こし、辺りを確認してみる。

そこは黒い空間に微かに見える光が射す場所、カチッ、カチッと
聞きなれた時計の音も聞こえてくる。

男「・・・時計？」

耳を澄ますと確かに「カチツ、カチツ」と時計が正確に時間を刻んでいる音が聞こえる。

どうやら起きた先、田の前から聞こえてくるようだ。
田を細めるように音がした方向を見据える。あつた、確かに『自分の部屋にある柱時計』とそつくりな物が少し離れた位置に鎮座していた。

男「ここは、俺の部屋・・・って事はないな」

当然ながらここが自分の部屋であるはずがない。だとしても、前方にある柱時計は自分の部屋にあるものだという確信が持てた。もちろん推測でしかないが・・・

声「あら、やつど到着？」

安堵した瞬間『時計』から女のような声が聞こえた。

男「誰だ？」

威圧を含ませようと発した言葉だったが、頭の整理がついていない状態だったのだろう。威圧といつよりも困惑した声に聞こえたかもしれない。

しかし、声の主は意にも介さず、一人で言葉を続ける。

女の声「あの婆さん、適当に選んだわけじゃなさそうだし、これはなら大丈夫・・・なのかしら?」

よく見据えると時計の裏から深紅の髪がはみ出している。暗い黒の中でも田を凝らすとはつきりとわかるほどの中の紅い髪。

男「・・・誰だと聞いていいのだが?」

冷静に、ただし警戒はしつつも聞き返す。敵意はない声色だが、正体が分からない状態で油断することは出来ない。ゆっくりと起き上がり、いつでも動けるように少し腰を落とす。

女「ちょっと、あんまり警戒しなくてもいいじゃない。オーナーになつたんだからさ」

深紅の髪ははっきりと女と分かる声が答えてくる。と、同時に時計の裏から姿を現した。

女「そう、私は『紅き腕輪』の精靈。あ、名前は無いから後で適当につけて頂戴ね」

女性にしては長身、深紅の髪を腰まで伸ばし、腰に手を当ててこちらを值踏みするような目で見ていて。その目が、全身を麻痺させるような感覺に襲われつつも

男「・・・現状が理解できんのだが?」

漫然と、そう答えるしかなかつた。

これが始まり これが出発地点

これが悪夢の始まりであった

第零章 ～ 境者 だいしゃ ～ 序幕 終幕

～ 腕輪 ～（後書き）

以前よりこのサイトを使っていた友人に勧められ、初の投稿となりました。稚拙な文章ですが、皆様の目にとまつて頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9597o/>

紅き腕輪 第零章

2010年11月17日04時15分発行